



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭隨筆

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭隨筆. 天界 1940, 20(233): 321-323

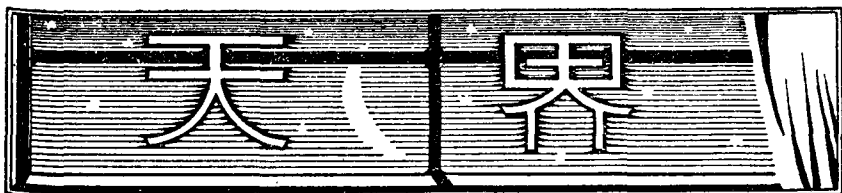
ISSUE DATE:

1940-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168063>

RIGHT:



第233號 (第 20 卷)

(昭和15年) 9 月 號

卷頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

本號に載せてある河田博士の文は、編輯局員が或る印刷物より轉載したものであるが、之れを読んで、いろ々々のことが考へられる。たま々々此の文がスライフ、博士のマザ々々と火星世界を寫した記事の直ぐ次ぎに載せられてあるのが面白い。

天文學は(或は、天體は)人の社會との接觸面の多いものである。今日の天文學者にとつては、天體は誠にハッキリした現實味のある物體(又は物質)であつて、只、手が届かないほど遠方に離れてゐるといふこと以外に、他の机上の物と比べて、何の變りもない。或る方法によつて、學者は、光や熱を奥の奥まで測り、大きさや形狀を測り、重さと密度、色彩、運動、距離、年齡など、いろ々な方面から、天體を自分のおもちゃの如く、極めて自由に取り扱ふ。この態度に興味を感じ、其の方法の巧妙なのに教へられ、其の研究結果にチャームされる。かういふ人は、勿論、世間に多い。――しかしながら、一方に於いては、こんなに天體をおもちゃにしてうことに不愉快を感じ、むしろ、天體はやはり天體として、秋の夜空を飾る飾りものたるに止め、星や月を夢ものの語りの主材としてのみ認めるといふ風な人士が、今も尚ほ世間には多い。わが河田博士なども、この種の人らしい。この河田博士を憤激させた天文學者とは、一體、誰であるか? 事は多分1924年の夏の火星の大接近であつたのだらう。其の頃自分は米國ハーバードの天文臺に居たから、日本の國內に於ける火星騒ぎの様子を全く知らないが、しかし、“火星の運河の畔りに紅葉が色づいて見える”とか何とか書いた天文家は、いかにも、少々書き過ぎの感が無いでも無いけれど、しかし、河田博士よ! 天體は、實に何時までも夢幻的な空想の對象ではないのです。試みに、本誌の此の本號の第333頁以下に詳しく記されたスライフ、氏の文を味はつて御覽なさい! 吾々から見れば、“運河の畔りが紅葉してゐる”といふのと、殆んど違ひが無いほど實感的な火星世界の模様を、もはや今日の天文家は、事實に於いて認識してゐるのです。“極冠、即ち雪の原野が一

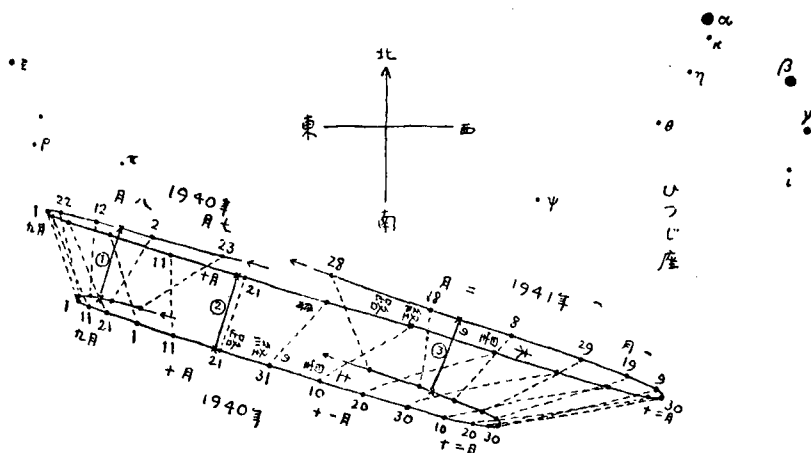
日に5マイルづつ後退して行く”とか、“雲霧が急激に動搖する”とか、“葉緑の色が濃淡いろ々々に變ずる”などといふ報告文は、決して決して“人を馬鹿にした”やうな、或は“おどけた”口吻ではないのであつて、熟練と経験と推論とから、今日の優秀な天文家たちは、或る意味に於いて、地球上の事よりも、月や星の世界の事を詳しく知つてゐるのである。學術の進歩發達といふことが、昔しと比べて、實に“恐ろしい”ほどのものであるといふことを、今更ながら、知つて貰ひたい。火星世界のことを餘りハッキリ書き過ぎるからと言つて、憤激するやうでは、進み行く天文學には追隨できない。之れは、ちゅうど、西洋人たちが、日本人は昔しながらのチョンマゲを結び、大小を腰にさしてゾロリゾロリやつてゐることをのみ期待し、洋服を着用して汽車や自動車に乗りまはす現實の日本人を見て憤激するやうなもので、全く的外れの憤慨と言はざるを得ない。○急報第438號にも取り敢へず書いたことであるが、いよ々々木星と土星とが近接して、毎夜、空には19年ぶりの珍景を呈してゐる。來年の二三月頃まで、まだ半ケ年ほど永續する現象であるから、別に急ぐ必要もなく、見る時機を逸するやうなことは誰もあるまいとは思ふけれど、しかし、星を見ることが、“義理”か“役目”かのやうな職業的天文家は別として、星を生涯の友とし、星を趣味とする人士は、やはり、出来るだけ早くから此の珍らしい現象を見て、今後半年の間に、この兩つの大遊星が往復する頭上の宇宙行路を楽しむと共に、友人間の話題をリードすることも一つの立場であらう。兩星が往還する天空経路は、こゝに入れた圖の通り、實に此の圖だけ眺めてゐても、興は盡きない。天體曆によれば、

	東 留	西 留	對 衡
木 星	本年9月5日	本年12月31日	本年11月3日
土 星	〃 8月28日	明年1月10日	〃 11月4日

であつて、星座は“ひつじ座”である。平常は誠に淋しい此の星座ではあるが、兩星侵入の御かげで、今明年は、この星座に花が咲いたやうに美しい。見える時刻から云ふと、本年八月は夜半の頃に東天から昇つて來て、南中時刻は日出の直前、九月は午前2時、十月は毎夜半、十一月は22時、十二月は20時となり、來年の二月まで、漸次に西へ移りつゝ、永く天空を賑はす。

木星と土星との會合は“20年ぶり”と言つて好いか、或は詳しく言ふと、19年餘ぶりであると言ふべきか。この以前の兩星の會合は大正10年(1921年)九月15日の一回きりであつた。當時は(天界の第一二巻を見られよ)其の星座は“乙女座”であつたが、ちゅうど其の時期は、兩星が太陽とも會合したため、地球からの距離も遠く、觀測は全く不可能であつた。——さて、次ぎの接近は1960年(昭和35年)であるが、其の時は、星座が“射手座”であるため、高度も低

く、時期も不便で、決して今回のやうな美しさは味はれない。



今回の兩星接近は、高度が高くて、殆んど頭上に近く、時機が秋で、兩星が共に太陽の反対側にある時であるから、萬事好都合である。兩星の最も近づく日は前後3回もあることも、吾々には愉快な消息である。

この頃の日體曆では、星が互に會合すると言つても、それは“赤經會合”を言ふ場合が多いけれど、實際の現象を眼で見る感じから言へば、“黃經會合”が本統の“會合”である。因みに、今回の兩星の會合について、比較して見ると、

	赤經會合	相互の距離	黃經會合	相互の距離
第1回	1940年8月15日	1° 15'	1940年8月8日	1° 10'
第2回	1940年10月12日	1 17	1940年10月20日	1 15
第3回	1941年2月21日	1 21	1941年2月15日	1 15

この次ぎに、このやうな立派な接近が見えるのは、60年後の、學曆2000年でなければならない。青年たちの中で、氣の長い人々は此の年を御待ちなさい。

(1940—8—1)

(第352頁より) 極大期でも、極小期でも、變りは無いのであるから。

いよ々々本誌の次號はダブル・ナンバ(倍大號)で、“十、十一、十二月號”とし、天象は十一月と十二月と兩月の空の豫報を紹介し、一般の記事についても例によつて、主筆の卷頭隨筆のほか、木邊氏や、S. I. 氏の續稿と共に、山本氏の“保井春海の星座”や、フィッ・博士の“極光を語る”、フロイントリヒ博士の“球狀星團”の新論、“プラネタリウム通信”等々、本誌の誇るべき記事として載せることとする。

(1940—8—20)